



箸墓古墳周濠の史跡指定に寄せて

纏向学研究センター所長 寺沢 薫

昨年11月18日の国（文化庁）の文化審議会の答申を受けて、去る2月9日、箸墓古墳前方部西側の隣接地（写真）が史跡として官報告示されました。2006年1月26日の「纏向古墳群」（ただし、現状では纏向石塚古墳とホケノ山古墳のみ）、2013年10月17日の「纏向遺跡」（太田地区の旧纏向小学校跡地と辻地区の大形建物群）の史跡指定に続く快挙です。また、今回の箸墓古墳周濠の史跡指定は、陵墓の隣接地としては1978年の大阪府羽曳野市の古市誉田御廟山古墳（宮内庁治定の応神天皇陵）の外堤・外濠一部の史跡指定に次ぐ事例となりました。向後の陵墓周辺の保存と整備・活用を実現していく上でも大きな推進力となることでしょう。

周知のように箸墓古墳は、宮内庁によって第七代孝霊天皇の皇女「倭迹迹日百襲姫命大市墓」に治定され、陵墓として管理されてきました。考古学的には、墳丘長約290mにおよぶ巨大な前方後円墳で、宮内庁書陵部による墳丘保全に伴う調査によって特殊器台・壺形埴輪や二重口縁壺が、奈良県立橿原考古学研究所や桜井市教育委員会による墳丘周囲の20次を超える発掘調査によって、周濠や中堤から多数の土器や木製品などが検出され、定形型の前方後円墳としては最も古い段階に築造された最大規模の前方後円墳であることが明らかになっています。

今回の指定理由の概要にはこのように書かれています。「箸墓古墳は突出した規模をもつ出現期の古墳であり、その後は奈良盆地東南部に大型前方後円墳が継続的に造られる。こうした状況は、大和政権の誕生とその発展過程及び当時の社会状況を知る上で重要である。今回、箸墓古墳の前方部墳端や周濠の存在が推定されている範囲において、大規模な商業施設の建設が計画されたことを受けて、建設予定地とそれに近接する土地の一部を史跡に指定し、保護を図ろうとするものである。」（『月刊文化財』641号 2017年2月1日刊）と。

2016年の夏、私たちは耳を疑うような情報に接しました。箸墓古墳の前方部西側の国道169号線までの間の土地約6000㎡がすでに売却され、それを核とした周辺の田畑を含めた約12,000㎡のエリアに大



規模な温浴・商業施設の建設計画が進められているということです。その信憑性が増すにつれ私たちは危機感をつのらせました。指定理由の歴史的意義では慎重にもふれられてはいませんが、箸墓古墳は『魏志』倭人伝に登場する倭の女王卑弥呼の墓の最有力候補にもなっている古墳です。これほどまでに著名で重要な古墳の前方部に接して大規模な



史跡 箸墓古墳周濠（赤枠が指定の範囲）

商業施設が建設されるようなことになれば、この国の文化行政のあり方が問われるだけでなく、考古学という学問の根源すら脅かすことになりかねない。ことの重大性に震撼が走りました。まずは文化庁、県の文化財保存課、県・市の関係部署、そして学界や宮内庁とも連絡を密にして対応を協議しました。聞きつけたマスコミや市民の方々からもコンタクトが相次ぎました。

結果、すべてがよい方向に進みました。共有された危機感は国－県－市の連携をスムーズに進めることができました。国の文化審議会専門調査会の先生方、県や市の文化財審議委員の先生方の努力も大きな力となりました。そして市長をはじめとする市幹部の英断がじつに素早かったこと、学界、マスコミ、地元市民の声なき声が拡がりを見せたこと、そして最終的には開発計画者さんが文化財の歴史的価値や環境保全の意義を十分に認識され、史跡指定の同意という英断をされたことです。そして古墳周辺の方々や多くの市民から、「よかった」という言葉をいただいたことが何よりの喜びでした。

しかし、残された課題も小さくはありません。「纏向古墳群」や「纏向遺跡」と並んで、新たに「箸墓古墳周濠」の用地を取得し、将来的に整備と活用のための予算を獲得していかなければならないことです。用地取得の財源の八割は国庫補助にあるとはいえ、指定した史跡地をいかに市民や国民のために還元するか、その重大な使命を私たちは課せられたことになります。

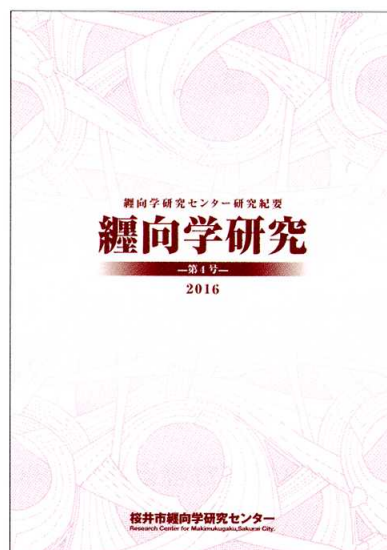
一昨年、私たちは専門委員の先生方や地元の方々意見をまとめて「史跡纏向遺跡・史跡纏向古墳群保存活用計画書」を策定し、向後の保存や整備の方針、利活用計画の指標としました（纏向学研究センターのホームページにてPDFを公開中ですのでご覧下さい）。豊かな文化遺産と歴史的環境に包まれた暮らしやすい＜場＞として、日本人の心のふるさととして、内外の多くの人々に集っていただけるような＜場＞として、今までの史跡地とは違った新たなモデルづくりを模索する必要があるでしょう。そのためには税金に頼らないクラウドファンディングの道なども模索しなければならないかも知れません。皆様の一層のご支援とご協力をお願いする次第です。

《纏向学研究センター紀要『纏向学研究』第4号刊行！》

纏向学研究センターでは研究活動の一つとして論文や資料紹介などを掲載した紀要を刊行しています。2016年3月には第4号を刊行しました。

本号には埼玉大学准教授の中村大介氏、遺跡材料研究所所長の藁科哲男氏、福辻淳所員が「大和盆地東南部出土の石製玉類の産地同定」、日鉄住金テクノロジー株式会社の鈴木瑞穂氏と丹羽恵二所員が「桜井市上之宮遺跡（第5次調査）・安倍寺跡（第7次・20次調査）出土銅関連遺物の分析およびその概要」、寺沢薫所長が「大和弥生社会の展開と特質（再論）」、森暢郎所員が「暗文土師器の編年と規範」、「須恵器として焼かれた土師器」を執筆し掲載しています。

本号では弥生時代前期から奈良時代まで、また考古学だけでなく材料科学分野の幅広い論考や報告を掲載することができました。特に玉稿を頂戴した先生方には御礼申し上げます。なお第4号については、今後PDF形式で桜井市纏向学研究センターホームページより掲載を予定しているほか、1～3号はすでに掲載しダウンロードできます。ぜひご覧ください。



紀要第4号

《平成27年度纏向学研究センター研究集会を行いました》

2016年2月20・21日に纏向学研究センター定例研究集会を行いました。

1日目は三澤朋未所員より「周辺埋葬としての方形周溝墓—古墳時代前期の墓域構成—」、福辻淳所員から「茅原大墓古墳と最古の盾持人埴輪」、森暢郎所員から「須恵器として焼かれた土師器」と題した発表がありました。また、纏向遺跡第186次調査（二反田古墳）出土埴輪の検討も行われました。

2日目は午前中に寺沢薫所長より「大和弥生社会の展開とその特質・再論」、共同研究員の坂靖氏より「古墳時代における奈良盆地の有力集団の系譜」と題したご発表がありました。午後からは、共同研究員の浦西勉氏より「民俗行事の仮面から見た纏向遺跡の木製仮面」と題したご発表があり、共同研究員の山田浩之氏より「神道から見た仮面」と題したコメント発表をいただきました。各発表の後には意見交換が行われ、活発な議論が交わされました。



発表される浦西氏



二反田古墳出土埴輪の検討



《今年も纏向考古楽講座やってます！》

今年度も纏向学研究センターでは纏向考古楽講座を開催しました。考古楽講座は毎年秋に連続講座として行っているもので、考古学や歴史、纏向遺跡に興味はあっても、いままで全く知らない方を対象に楽しく考えてみようという講座です。今年度は9月に「考古学・纏向遺跡ってなんだろう?」、10月に「土器を観察し、拓本をとってみよう!」、11月に「古代の技術を体験してみよう!」の講座を行いました。



考古楽講座の様子

普段なかなか触る機会のない千数百年前の土器を実際に触り、考古学の基本である型式学的研究方法について考えてみたりし、楽しく考古学に触れていただきました。少人数で和気藹々とした雰囲気で行っています。2017年もホームページ等で広報の上開催する予定ですので、是非お越しください。

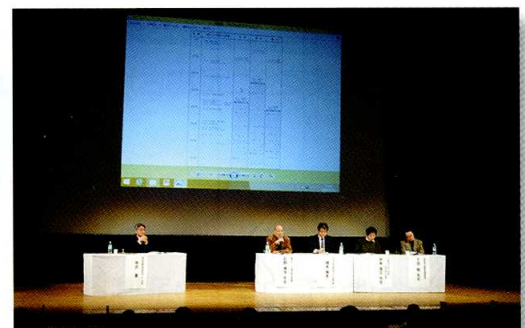
《桜井市制施行60周年記念 シンポジウム 「国家誕生の地、桜井を語る」が開催されました》

2016年12月11日（日）に桜井市市制60周年記念事業としてシンポジウム「国家誕生の地、桜井を語る」が開催されました。当日は約900名の方にご参加いただきました。纏向学研究センターからは、寺沢薫所長がシンポジウムのコーディネーターとして、橋本輝彦所員が講師として参加しました。

まず、記念講演として香芝市二上山博物館名誉館長の石野博信先生より「纏向王宮から磯城・磐余の大王宮への道のり」と題してご講演をいただき、続いて橋本所員が「オオヤマト・イフシ地域における古墳時代前期の集落と古墳」の講演がありました。お昼休みを挟んで大阪市立大学大学院文学研究科教授の岸本直文先生より「倭王権と祭政分権王権」、奈良県立図書情報館長の千田稔先生より「古代王権と山一穴師山・三輪山・忍坂山などー」の基調講演をいただきました。



講演に聞き入る来場者



白熱するシンポジウム

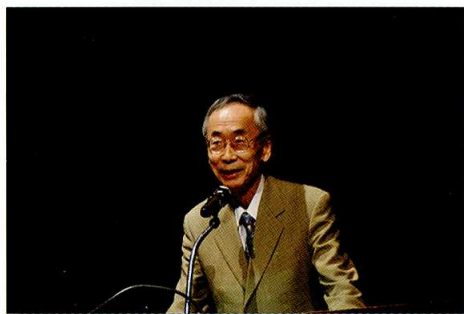
シンポジウムでは、講師によって大きく異なる纏向遺跡の実年代やオオヤマト・イフシ地域の性格を巡って白熱した議論が交わされました。ご参加いただきました皆様大変ありがとうございました。

《桜井市纏向学研究センター東京フォーラムⅤ「卑弥呼」発見！ —鬼道を事とし、能く衆を惑わす…卑弥呼の鬼道—を開催しました！》

2016年10月9日（日）に東京都千代田区一ツ橋にあります日本教育会館一ツ橋ホールにおきまして、東京フォーラムⅤ「「卑弥呼」発見！—鬼道を事とし能く衆を惑わす…卑弥呼の鬼道—」を桜井市の主催、読売新聞社、歴史街道推進協議会、奈良県ビジュアルビューローのご後援により開催しました。当日は約700人の方々にご来場いただきました。2011年にはじまった纏向学研究センター東京フォーラムもこれで5回目となり、首都圏の皆様にも年1回、定例のフォーラムとして親しんでいただけているのではないのでしょうか。

今回のフォーラムは2016年1月に開催しました東京フォーラムⅣ「卑弥呼の居処」に引き続き、魏志倭人伝に記された卑弥呼の実像を考えてみようという趣旨で、卑弥呼が執り行ったとされる「鬼道」に焦点をあてたものです。比較的詳細に記録されている居処に対し、鬼道は不明な点が多く、その実態をめぐっては議論のあるところです。

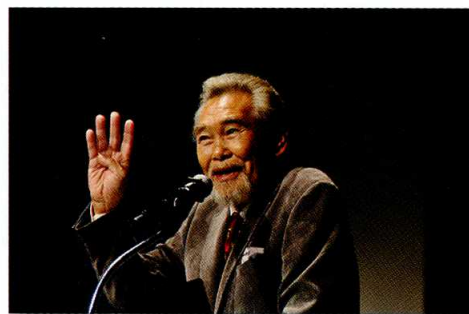
当日は考古学や古代史の先生方にご講演いただいた後、寺沢所長の司会・進行によるシンポジウムを行いました。



辰巳和弘先生



武田佐知子先生



荻谷俊介先生



石川日出志先生

まず日本考古学協会会員で俳優の荻谷俊介先生より「共立された卑弥呼—女王卑弥呼の実像—」、続いて明治大学教授の石川日出志先生より「“親魏倭王” 卑弥呼」と題したご講演をいただきました。昼休みを挟んで元同志社大学教授の辰巳和弘先生より「卑弥呼の鬼道と壺形墳の誕生」、追手門学院大学教授の武田佐知子先生より「女王卑弥呼の衣服」と題してご講演をいただきました。弥生～古墳時代にかけての祭祀と鬼道の関係や卑弥呼がどのような服装であったのか、踏み込んだ見解が示されました。

シンポジウムでは、卑弥呼が共立された年代と纏向遺跡の成立時期との関連性や、「鬼道」の性格やその具体像、卑弥呼の実像にまで踏み込んだ活発な意見が交わされました。

ご参加いただきました皆様大変ありがとうございました。次回は2017年10月に開催する予定ですので、ぜひご参加ください。

《纏向学セミナーを開催しました！》



講演に聞き入る参加者



講演される坂先生

2016年は、第6回と第7回の纏向学セミナーを開催しました。1月23日の第6回「ヤマト王権と葛城の地域集団」では纏向学研究センター共同研究員で奈良県立橿原考古学研究所附属博物館総括学芸員の坂靖先生をお招きし、奈良盆地南西部の「葛城」の地域とヤマト王権との関係について、近年の調査で見ついている南郷遺跡群や秋津遺跡といった遺跡を通してご講演をいただきました。坂先生は徹底して葛城地域の中でどのように集落が発展・展開していったのかを実際の調査所見に即して検討・考察されました。

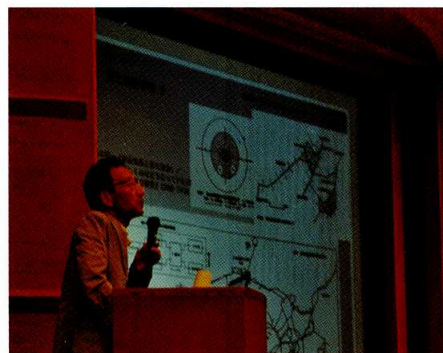
対談では、南郷遺跡群の調査時の寺沢所長と坂先生のエピソードからはじまり、「なぜ葛城地域には大きな前期古墳が少ないのか？」という疑問や、どこまでが葛城地域に入るのかといった議論がなされ、最後まで話題が尽きない対談となりました。

7月16日の第7回では「纏向以前—唐古・鍵遺跡と邪馬台国—」では田原本町教育委員会文化財保存課課長の藤田三郎先生をお招きし、田原本町に所在する弥生時代の巨大集落である唐古・鍵遺跡についてご講演をいただきました。

藤田先生は、長年にわたる自らの唐古・鍵遺跡の調査所見をもとに、遺跡の中心性、特殊性を絵画土器や銅鐸鑄造痕跡、大型建物の存在、褐鉄鋳に入れられた勾玉といった具体的な遺構・遺物から述べられました。

対談では、藤田先生が学生時代に参加された寺沢所長が担当した唐古・鍵遺跡第3次調査のエピソードに始まり、唐古・鍵遺跡と纏向遺跡の関係や、弥生時代から古墳時代への移行を、近畿地方における内的な発展結果とみるのか、外的な刺激を受けた結果であるのか、唐古・鍵遺跡が影響を及ぼせた地域はどこまでなのかなど、白熱した議論が交わされました。

どちらのセミナーも300名を超える方々にお越しいただき、満員となりました。大変ありがとうございました。纏向学セミナーは2017年も継続して開催を予定しております。ホームページ等で告知いたしますので是非お越しください。



講演される藤田先生



対談される藤田先生と寺沢所長

《大神神社さん主催の講座「三輪山体験教室」で講師を務めました》

2016年8月20日（土）に、桜井市にあります三輪明神 大神神社さん主催の講座「三輪山体験教室」が開催され、橋本・木場所員が講師を務めました。この講座は、小学生を対象に様々な体験を通して子ども達の自主性や創造力の向上を目指し企画されたものです。年間11回の講座が開催されており、今回は8月の講座「昔のお金を作ってみよう」の講師を担当しました。



講座では日本のお金の歴史や、お金の形・刻まれた文字に関するレクチャーを受けていただいた後、出土遺物から再現されたシリコン製の鋳型に低い温度で融ける金属を流しこみ、日本最古の貨幣である富本銭と和同開珎の実物大モデルを作りました。

身近だけど意外と知らないお金にまつわる様々な話を聞いたり、作ってみたりすることを通して、お金の大切さを楽しく学ぶことができました。お越しいただきました皆様、ありがとうございました。

《東京日本橋の奈良まほろば館でのイベントに参加しました！》

桜井市と天理市、磯城郡各町の見どころを首都圏の皆様を紹介するイベント、「日本の国づくりの源流やマトー倭国成立の道一」が東京の日本橋にある奈良県のアンテナショップ奈良まほろば館で開催されました。期間は2016年7月21日（木）から8月2日（火）までです。

7月23・24日の土日にはウィークエンドスペシャルとして各市町の発掘調査担当者によるミニ講座や和同開珎の鋳造体験や勾玉づくりなどのワークショップが行われ、纏向学研究センターからは橋本所員と木場所員が参加しました。

ミニ講座では、唐古・鍵遺跡、纏向遺跡、大和古墳群という奈良県屈指の遺跡を調査担当者が紹介する講座ということもあり、2日とも大盛況でした。ワークショップも2日間で200名を超す方にお越しいただき、楽しんでいただくことができました。

ご参加・ご協力いただきましたみなさまありがとうございました。



鋳造体験中！



ミニ講座で講演中の橋本所員

《纏向遺跡を掘る調査員たち9》

桜井市の調査員紹介コーナーです。今回は藤村裕美さんを紹介します。藤村さんは中国唐代の鏡研究を専門とされています。

はじめまして。平成28年の4月より桜井市でお世話になっております藤村と申します。天理大学を卒業後1年間三重県松阪市で働いていました。出身は桜井市なので、自分が生まれ育った場所に関わることができてうれしく思います。しかし、文化財に関われることに光栄に思いつつ、まだまだ緊張する日々を送っています。

そのため戸惑うことも多いと思いますが、日々精進と思いがんばっていきたいと思いますので、よろしくお願いします。



埋蔵文化財センター展示収蔵室からのお知らせ

埋蔵文化財センター展示収蔵室では、平成29年4月19日（水）から10月1日（日）までの期間、桜井市立埋蔵文化財センター平成29年度速報展『50cm下の桜井』として、平成28年度中に桜井市内で行われた発掘調査成果の速報展示を行っています。纏向遺跡の成果をはじめ、上之庄遺跡や大福遺跡、三輪遺跡など市内各地の遺跡から出土した、いろいろな時代の遺物を展示しています。詳しい内容については、下記お問い合わせ先もしくは当センターホームページ（<http://www.sakurai-maibun.nara.jp>）をご参照ください。

展示開館時間 9:00～16:30（入館は16:00まで）休館日 毎週月・火曜日及び祝日の翌日

入館料 / 大人200円 小・中学生 / 100円 20名以上の団体は大人150円 小・中学生50円

桜井市芝58-2 お問い合わせ先 TEL0744-42-6005

刊行物のご案内

☆纏向学研究センター紀要『纏向学研究』第4号 1000円

☆ガイドマップ『纏向へ行こう!』200円（2014年3月改訂 第5版）

☆桜井市制施行60周年記念特別展示

『拓かれた扉～桜井の郷土史研究はいかにして始まったか～』300円

☆桜井市制施行60周年記念プロジェクト

シンポジウム『国家誕生の地、桜井を語る』発表要旨集 500円

※ご購入方法は 桜井市立埋蔵文化財センター内（公財）桜井市文化財協会までお問い合わせください。

お問い合わせ先 TEL 0744-42-6005 FAX 0744-42-1366

<http://www.sakurai-maibun.nara.jp>

編集後記

今号では箸墓古墳周濠の史跡指定についてみなさまにご報告いたしました。仰ぎ見る箸墓古墳の美しい姿がこれからも永く皆様にご覧いただけるよう、読者の皆様のお力添えをいただきながら活動していきたいと思っております。

(M)

纏向考古学通信 Vol.10

発行 平成29年3月30日

編集 桜井市纏向学研究センター

〒633-0085 奈良県桜井市東田339

TEL 0744-45-0590

FAX 0744-45-0590

ホームページ 纏向学研究センターで検索!

